

「半農半 X」を生きる人びと

中島愛彩

キーワード：マイナー・サブシステム、半農半 X、農、兼業、抵抗

要旨

本稿は 5 章からなる。

第 1 章では、本研究の目的と背景を述べる。本研究の目的は、「半農半 X」の当事者たちが、X との両立にあたり時間的にも体力的にも制約がある中で、なぜ農の実践を続けているのか、またその意味生成の過程にはどのような経験があるのかを内側から描き出し、マイナー・サブシステムの新たな意義について論じることである。

第 2 章では、先行研究のレビューを行う。第 1 節ではマイナー・サブシステムに関わる研究を紹介し、半農半 X の農実践を理解するための理論的枠組みを確認する。第 2 節では、半農半 X の「農+非農」の構造の原点をたどるために、日本の兼業農家研究を振り返る。その中で、これまで「例外」や「農業衰退の残存形態」とされてきた兼業農家が歴史的にどのように再評価されてきたのかを整理し、本研究の目的に近づけるために、農家の兼業に対する非経済的動機に関する研究も取り上げる。第 3 節では、半農半 X に関する近年の研究を取り上げ、半農半 X が個人や社会にとってどのような意味を持つ実践と捉えられているかを確認する。それらを踏まえたうえで、第 4 節では、本研究の立ち位置を確認する。

第 3 章では、本研究の調査概要について述べる。第 1 節では調査期間と調査方法を、第 2 節では筆者自身の農実践について説明する。第 3 節には調査協力者を記している。

第 4 章では、筆者自身が農を実践するなかで身をもって経験したことをオートエスノグラフィーの手法で記述すると同時に、調査に協力してくださった半農半 X 当事者の皆さまの語りを交えて、「なぜ半農半 X を続けるのか」という問いの答えに迫る。第 1 節では、半農半 X 当事者にとって「自分の食べるものを自分で作る」ことが「強さ」として認識されており、マイナー・サブシステムが食べもののみならずそれによって生まれる互酬的な人間関係によって「お金がなくても生きていける基盤」がある安心感を得るための実践であると同時に、自分の口に入るものの安全性を担保するための実践として理解できることを示した。また、マイナー・サブシステムのその「直接性」ゆえに、半農半 X 当事者たちは植物が育って食べものとなり自分の口に入

るまでの過程にあった「物語」を記憶しえ、その記憶が感動や面白みを生んでいると示した。第2節では、半農半X当事者たちがよく口にする「畑に行くと元気になる」という現象を、畑で研ぎ澄まされた身体感覚が畑で共存している生きものたちの自発性を敏感に感じ取ることで、「X」において押さえつけられていた自らの自発性が解放される経験として理解できるということを示した。第3節では、半農半X当事者たちが「育てる過程」を楽しみに農の実践を続けているという点に着目し、農の育てる過程での「自発性を持った主体」としての植物たちとの「やりとり」を通して、植物たちの動きや変化を見ることに楽しさや面白さを見出しているということを示した。第4節では、植物のいのちや日本の在来種への使命感から農の実践を続けている当事者たちの語りに着目し、マイナー・サブシステムが「人間/自然」という二分法に基づく思考からの脱却に寄与するということを示した。同時に、マイナー・サブシステムを国としての危機に対する抵抗として見る見方を提示した。第5節では、マイナー・サブシステム継続の動機付けとなっている「今年の失敗を来年に活かす」楽しさが、農の世界を形作る円環的な時間概念が前提となっていることを示した。

第5章では、第4章の結果をもとに、設定した問いに対して6つの答えを提示する。その中で、マイナー・サブシステムの「抵抗」としての新たな意義を提示した。